



CODE LETTER

Citizens towards Overseas Disaster Emergency

2021.10.5 Vol. 68

写真：アフガニスタン ヒンズークシュ山脈を望む

Contents

2021 年度 CODE 基本方針	1
特集：すべての人に宿る ボランティアの心根	2
2020 年度事業報告、 2021 年度事業計画	6
寄稿：コロナ禍と災害	8
CODE 未来基金 NEWS	10
プロジェクトレポート	12
スタッフ活動記録・今後の予定	14
会員・寄付者ご芳名	15
活動へのご協力のお願い	16

2021 年度 CODE 基本方針 「新たな四半世紀に向けて、足元を見つめ直す」

震災から四半世紀の節目は、新型コロナウィルス感染症が世界で猛威を振るい、私たちの日常は一変し、翻弄されてきた1年でもあった。世界では厳しいロックダウンや自粛で多くの人が自由や行動を制約されたことで、平素から厳しい状況にある人たちはより厳しい状況に追いやられた。STAY HOME の中で「自分にできることはないか」と悶々としていた人が少なくなかったこと、途切れのない支援を地道に続けてきたNGO/NPO/ボランティアがいたことも忘れてはならない。

昨年、開催した「コロナとこれからの市民社会に向けて」（共催：近畿ろうきん、後援：コープこうべ、神戸新聞社）でも「私たちがこれまで見えていなかった、見えないことにしてきた、対応してこなかった諸々の平時の問題やゆがみがあらわになった」、「自分の目に入ってくる情報しか見ていなかった」、「コロナで見せつけられたこれまでの社会の持続不可能性や不正義を今こそ社会を転換していくきっかけにする」などを多分野のNGOたちと互いに確認し合うことができた。

コロナ禍の経験を世界と共有する中で、世界のそれぞれの地域で起きていることと日本の地域で起きてることは、根本のところではつながっていることも見えてきた。STAY HOME の中で公助から取りこぼされている人たちを支えていたのは、まさに市民たちであった。

また、コロナ禍における中国の学生との交流の中で地域とつながることの大切さもわかつた。そんな中、未来基金にかかわる一人の大学生が、テレビで映る医療従事者の厳しい状況と

自己とのギャップを感じ、足元を見直そうと動き出した。地域で支援と支援の隙間で取りこぼされている人と支援者をつなぐボランティアの役割に彼女自身が気づいた。こうした貴重な事例から私たちは、支援の可能性や有意義な価値を社会に提示しなくてはならない。

次の四半世紀に向けて私たちは何を学ばなくてはいけないのか。震災 26 年企画として開催した「ポストコロナに向けて、『いま』、1.17 にどう向き合うか」では、阪神・淡路大震災から今までのボランティアのありようを再度捉えなおし、目の前の困っている人に手を差し伸べるという原点に立ち返ること、被災地の現場の一人ひとりに直接出会い、個を尊重し、その声を丁寧に聴くこと、被災地から始まる小さな動きをボトムアップで支えることなどコロナ禍でも変わってはいけない大切なことも確認し合うことができた。

26 年前、被災地 KOBE に駆けつけた約 137 万人のボランティアには、目の前の困っている人に手を差し伸べたいという、人としてごく当たり前の 137 万の“心根”があった。

CODE 前代表理事であった芹田健太郎は、CODE Letter Vol.60 の巻頭言で、「人が人である限り、この心根はすべての人に宿っている。この心根こそ継承すべきだ」と語っている。

今一度、1.17 の原点に立ち返り、足元を見つめ直し、世界の人たちとコロナ禍を乗り越える智恵を分かち合い、そして共に行動していく震災 26 年としたい。

(CODE 事務局長 吉椿雅道)

すべての人に宿るボランティアの心根

コロナ禍で起きている困難や分断を乗り越えるために、私たちは今一度 26 年前の阪神・淡路大震災の原点に立ち戻らなければいけないのではないか。そうした議論から、CODE 前代表の芹田健太郎氏を講師としてボランティアの心根や政府とボランティア・NGO の関係などを学ぶ講演会を開催しました。今回は講演録をお届けすると共に、改めて芹田氏に「最後の一人まで」について寄稿をいただきました。また、芹田氏は今年で神戸を離れ、ご家族のいる神奈川県に拠点を移されます。これまで活動を共にしてきた方々から、芹田氏へのメッセージをお寄せいただきました。(立部)

【震災 26 年企画】すべての人に宿るボランティアの心根～阪神・淡路大震災の原点に立ち戻る～

開催日：2021 年 7 月 24 日（土）

方 法：オンライン（Zoom）開催

基調講演：芹田健太郎（CODE 前代表理事、神戸大学名誉教授）

人間の誕生、生命のつながり

まず、私の専門は法律なので、法と社会の問題から入っていきたい。その意味ではまず、人間の誕生について。家族の誕生、集団の誕生、社会の誕生となっていくと思うが、ご存じのとおり、生き物、生命の引継ぎについては、単性生殖と両性生殖がある。両性生殖の場合、女性から女性に受け継がれていくミトコンドリア、男性から男性に遺伝していく Y 染色体がある。それをさかのぼっていくと一人の女性と男性に行きつく。女性をエヴァ、男性をアダムと仮に呼んで、そこからずっとつないで今日に至っている。

「エヴァ」とは古代ヘブライ語で「生命」「命」という単語の語幹から取られたと言われる。つまり、命をつなぐものという意味である。地球上に鉱物があり、鉱物から生物が生まれ、生物から動物、動物からやっと哺乳類の時代になり、その先に人類が出てくる。その中で、人類だけが精神圏を持っているという。しかし実は精神圏を持っているのは人類だけではなく、イルカやクジラも彼らの言葉で連絡をし合い、集団をつくっている。その精神圏の中で人間が到達しているのが最も上位と言われる。

他方で、我々の体の中にはほとんどすべての鉱物が入っている。それはすべて他のものから取ってきたものである。人間が食物連鎖の最上位にある。ただ、それは自分より下位の者たちを支配することではなく、自然との共生。つまり我々は自然の中に住んでいるということ。それは、例えば北極や南極の氷が解けて海平面が上昇して、ある島国はもう少ししたら沈んでしまうというような現象となっても出てくるが、そういう段階まで人間は達している。

人間は、食物連鎖の上でも、イルカやクジラが持つ精神的なところでも、最も上位にあると言われる。それによって人は尊いのだと基礎づけられるが、それを作りは「人間の尊厳」と呼んでいる。人間の尊厳とは要するに、人は人であるだけで尊いということ。

社会とルール・法・公益

人には女性と男性がいて、子どもがいて、家族をつくり、家族が集まって集団をつくり、もっと大きな社会になり、そのようにして、日本では日本社会という社会が

存在する。世界中には約 200 の国があるが、その国が集まって、国家がメンバーである国際社会をつくっている。いずれの社会もルールを持っている。家族の中のルールもそれぞれ違うだろう。CODE は CODE のルールで動いている。

そういうルールの中で、どの社会にも共通するものがある。そして社会にルールがあるということは、ルールをみんなが守り、守らない場合には守らせるようにするということである。社会には安定が求められている。社会の安定はルールで支えられている。社会のルールを法と呼んでいるが、「法」という言葉はヨーロッパの多くの言葉では同時に「正しい」「正義」という意味も持っている。人間は、それぞれ一人ひとり自己の意見を持っていて、それぞれが正しいと思うものにはかなりの幅がある。その共通の部分を集めてきて、ルール化している。そのことによって社会が安定している。安定を保つためにリーダーがいて、集団がある。それが我々の言う「政府」「統治」government ということの中身である。政府はみんなに共通する利益、正しいと思うことを自分の中に持っていることが必要。そのことを「共通する利益」「共同利益」common interest と言ったり、common を public と言って、「公共の利益」「公益」と呼んだりしている。公益や共通益と言われているものは社会の枠組みであって、それぞれの社会が類似したものを持っている。

しかし、人間自体に注目すれば、一定の年齢に達するとそれ以上体長は大きくならない。性別、人種にかかわらず、人類である限りはみな共通のものを持っている。男性も女性も人間であることに変わりはなく、人間は男と女から成っていて、女から生まれている。ただ、昔から子どもが必ずしも身体健康に生まれてくるということはなかった。ローマ法では今でいう障がいを持つ子どもが生まれた時、そういう子どもを闇に葬るということがあった。ローマ法では、それは人ではなかった。モンスターの子どもとルール化した。それは「嘘」なのだが、それによって人の苦しみを救おうとした。殺人罪には問わなかった。それは今でも法律の中にある。

あるいは、社会の安定のために「人を殺した者はとことん追い詰めて、捕まえて、償わせるべきである。それが正義の要請だ」とする人もいる。しかし、何十年も社

会で殺人犯を追求するということは大変なエネルギーと時間が必要でもある。そこで例えば社会的に時効という制度をつくって、なかつたことにしてしまう。時効が来たら犯罪ではなくなるとする。それも、言ってみれば「嘘」なのだが、そうやって社会は我々の安定を保っている。

NGO・NPO・私人と政府との公益をめぐる関係

社会はそれぞれ違うと言ったが、NGOの話に引き付けると、国連憲章でNGOは非政府組織と訳すが、アメリカ型ではNPOと言っている。それはなぜかというと、ヨーロッパ型は権力が非常に強く、その下で民間の動きがつくられてきた。それに対してアメリカはヨーロッパなどからの移民で成り立っていた。外から来た人が家を建てなければならない。教育もしなければならない。教会もつくらなければならない。そこで自治的な組織をつくった。それは非営利だったので、教育も病院も非営利。つまり、まずNon-profit organizationが先にあった。みんなの共通のものを担っていて、政府というものがないので、税の控除も当たり前のようになっている。今もアメリカではNPOに対して税の免除や優遇は行われている。

日本はいわばヨーロッパ型で、地方権力がある。どうしてもNon-government、非政府・非統治の団体として育ってきた。日本でCODEは法人格を持っていて、NPO法に基づく法人として存在している。法人格を持つということは、法律の下でその制度下にあるということを意味している。NPOはNPO法が定める活動分野ごとに作られており、そこで定められている報告や行動計画などに従わなければならない。一方、日本にも法人格のないNGOはたくさんある。CODEの姉妹団体である被災地NGO協働センターはNGOと称していて、法人格は持っていない。

災害にあたっていわゆるボランティアとして行く人は、個人で行っている。団体で参加することもあるが、基本としては個人の動き。阪神・淡路大震災の時はまさにそうだった。自分で決めて、学校を休んだり会社の休暇を取ったりしてKOBEへやって来た。寝袋だけで来た人たちも、何も持たないで来た人たちもいた。その後、NGOとして出発し、NPO法ができてNPO法人になったところもある。一方、個人でボランティアをしている人たちもたくさんいる。その人たちは自分でひそかに決めて自分で行動している。自分の正義とでもいうか、やむに已まされず動いている。それが受け入れられるのは、それが広い意味でみんなの助けになっていて、みんなが利益だと思っていて、みんなが実現すべき共通のものであるからだと言うことができる。

今ではそういう意味で「共通のもの」「共通の利益」を「公益」と呼んで、NPO法ではNPO法人が特定の公益を担っている。政府は一般的なものを担っている。このように社会が重層的になっている中で私たちは活動している。

政府と民間、政府とNGO・NPO・私人との関係は、共通の利益、公益、共同益をめぐってどういう関係にあるのか。最も基本的なところにだんだん絞られてきたが、日本でも政府系企業の事業が民間委託され、政府が行わなくなりつつある。そこで残っていくものは何か。その



大地震後のハイチにて シスター須藤と共に

最も基本的なところを政府が担う。さらにもう少し幅広く、地域の住民たちのところで、地方公共団体である都道府県、市町村がそれを担う。では我々は?という問題がある。そこで重要なのは、我々は何でもやるが、しかし、我々ができないところ、基本中の基本は政府が担わなければならない。それをやらないなら、我々は「なぜやらないのか」と追及することができる。それは意見として政府に取り上げられて実現されることもあるかもしれないが、基本的にはそういう仕事の配分になっている。

利益の違いに基づくものというのは、仕事が「補完性の原則」と言われる形で動いている。政府がやらないのであれば、やはり我々がやらないといけない。アメリカはもともと政府がなかったので、教育も美術館も、何でもNPO法人。日本は、まず国立大学。そして公立大学。そして今は大学としては私立大学が一番多い。資源配分が少ないという議論はあまり大きく出てきていないが、例えば授業料という面からすると私立大学の授業料に昔ほど極端な差はない。ただ、研究費などは大きな相違がある。それは今の日本を見ていると、やはり政府の努力が足りないと言えばいいのではないかと思う。

コロナ禍を通じた危機概念の変化と「人類」社会

コロナ禍について、災害はこれまでnatural disasterとman-made disasterを分けてきた。例えば化学工場の事故や、災害の後の支援が追い付かないという二次災害も人災。災害のとらえ方が多様化してきているが、今回のコロナ禍によって、災害の概念も広くなったと言ってよいのではないか。

WHOでは、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」という概念を規則の中に盛り込んだ。そして委員会が緊急事態ととらえれば、人の行き来の制限を勧告するようになった。人類は第二次世界大戦後、戦争と平和の武力の行使に限って取り組んできた。現代は武力の行使がないわけではないが、より全面的に出てきているのがコロナのような災害。CODEもこれまでコロナ禍にある人たちと議論を重ねてきて、施策も打ち出してきた。現代では武力行使という意味での安全保障よりも、むしろ公衆衛生の方が大きいと言ってもいいのかもしれない。

こういうことを、世代を超えて受け継いでいかなければいけない。これまでCODEは水平的に会員をたくさん増やすよりも、垂直的に世代を超えてつないでいくということを方針にしてきた。なので、CODEは会員

を増やすということはやってこなかったが、人をつなぐということはやってきた。今も若い人につなぐという努力をしている。ただ、次の世代に受け継ぐときに、基本的なこと、人類は何なのかというようなことについての議論を詰めておかないと、いったいどういうことをやればいいのかというのが見えてこないのでないか。

人類は何かという問い合わせで「人類」という考え方が出てくるのは 1960 年代くらいから。人類の名において、人類社会のために活動するというものが外交、つまり国家利益を追求することの目標にもなってきた。ある時期に「自国第一主義」というのがあった。アメリカのトランプ大統領よりもっと前にも、アメリカ第一主義を唱えた人がいた。しかし、そうではなく人類こそ大事だと。今回のワクチンをめぐっても、金持ちのところだけワクチン接種ができるというのではなく、世界中の人類のために、お金で買えないなら、お金を出し合ってワクチンを回そうではないかという運動も出てきた。日本政府は政策の誤りからワクチン製造がおろそかになり、ただ移送手段なら提供できるから、よそから買ってきただけのものは提供できるという形でやってきた。今はワクチン製造にも力を入れつつある。そういうことについても声を挙げる必要があるのでないか。

最後の一人まで——具体的な人を見る

しかし、人類と言って大きく見るのではなく、一人ひとりを支えようではないかということで、私たちはずっと「最後の一人」と言ってきた。CODE が活動していて、NPO 法が作られたとき、一部の人に「NGO は誰の代表なのか」と言われた。国会議員や地方議員は「我々は選挙民の代表だ。託されたものがある。政策を訴えて、それに対して票を入れてもらっている。NGO は勝手なこ

とばかり言ってあてにならない」と言われた。NGO は、CODE は誰の代表なのかとずいぶん考えた。とことん突き詰めると、NGO は「一人」を代表している。「あの人」「この人」を代表している。具体的な人を見ていかなければ、我々の活動は抽象化してしまう。抽象化するとそこに人はいなくなる。だから我々は「最後の一人まで」と言う。

聖書の中で、100 匹の羊を飼っている羊飼いの話がある。1 匹の羊がいなくなってしまった。すると羊飼いは 99 匹の羊を置いて探しに行ってしまった。99 匹の羊を置いていくというのは大変危険なことなのだが。しかし羊飼いはその 1 匹を探しに行く。

あるいは 1960 年代の途上国の開発をめぐっての話がある。例えば 100 人からなる村があるとする。多数決で物事を決める、ということを決めた。過半数、3 分の 2 多数、最大多数 99 人。では残る人はどうするのか？ 残る人は必ず切り捨てられてしまう。そのことの重みを NGO は考えないといけない。

実は最後の一人が誰なのかはわからない。ただ、我々がわかっていたのは、被災者のこと——どこまでを被災者とするかはとても難しかったが。仮設住宅に入れていない人とか、具体的に人を見ていくとわかってくる。そして最後の一人まで、ちゃんと我々の対象としている。19 世紀の行政原理は最大多数の最大幸福。最後の一人から逆転したらどうか。99 人は何をやっても多数派なので強い。残った 1 人は弱い。選挙でも、障がい者が投票に行くのはとても難しい。しかし最近は、高齢者のためにバスを出すようになった。昔はそんなこと考えられなかつた。つまり、そこまで我々人間は来ている。これは大変大きな希望だと思う。コロナの後もそうだろうと思う。

寄稿

最後の一人

芹田健太郎

1995 年 5 月ロシア・サハリン州北部で M7.6 の大地震発生。神戸はまだ混乱の真っ只中であり、がれきと土ぼこりの中の神戸も寒かった。しかし、サハリンの寒さがよく分かるから、毛布等を運んだ。

救援活動は「お互いさま」で始まった(CODE 編著『災害救援』)。

「一人は万人のために 万人は一人のために」は、イギリス発祥の生協やドイツ起源の農協運動のほか、ラグビー等の団体競技でも用いられる古代ゲルマンの言い伝えだと言う。

99 匹の羊を残して、1 匹の子羊を探しに出る羊飼いの話が聖書にある。

僕たちの経験では、しかし、今夏の豪雨、長雨でも見られるように、「あの人」がまだがれきの下に、泥の中に、埋まっている、という叫びが「最後の一人」の存在を示し、そのために働く。そして、見つけ出されると安堵する。こうした経験の積み重ねの上に、「言葉」が生まれる。

アパルトヘイト（国家による組織的人種隔離政策）

と闘って 1984 年にノーベル平和賞を受けた南アのツツ主教は次のように言った。

「人間になるためには、真に自由になるためには、お互いが必要なのです。私たちは、人間の仲間、共同体、平和の中でだけ人間になれるのです。」

人間が繋がっているからこそ、まだ一人残っているのではないか、まだ声を聴いていない小さき者、弱き者がいるのではないか、と問うことができる。

人間のつながりにこそ、最後の一人の重要性の根拠がある（芹田『国際人権法と日本の法制』（新書）（2021 年 10 月刊））。



KOBE からサハリンに届いた物資コンテナ

メッセージ～神戸を離れる芹田健太郎氏へ

芹田先生を送る

芹田先生とお会いしたのは、1995年の阪神・淡路大震災の年「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を立ち上げる相談が始まった9月ごろだった。その年12月の第1回フォーラムを皮切りに、CODEの設立につながり、26年間のお付き合いが続いた。

震災前から神戸新聞の情報科学研究所（当時）で地域研究とまちづくりの調査研究を仕事にしていたこともあり、また市民主体の震災復興とNGO／NPOの市民活動のすそ野を広げることをライフワークにしていたこともあって、国際的な視野からNGOを学んだことは何よりも大きかった。

この国でなぜ、ホンモノのNGOが育ちにくいのか。その政治、経済、社会の要因を学び解説していくのに、CODEでの理論と実践の歩みや議論は大いに役立った。

「震後KOBE」発の「新しい市民社会」をバージョンアップする好機でもある「コロナ後社会」を目前に、ともに土壤を耕していく機会を共有できなくなるのは残念だが、これからもご指導ください。

松本誠（CODE元理事・市民まちづくり研究所）

芹田先生、いつまでもお元気で

芹田先生のお嬢さんと長女が小学校以来同じ私立の女子校でお友達だったことから新聞に写真が出ていると「この人は、芹田さんのお父さんだよ」と聞かされていました。実行委員長をされた「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」では、まちづくり以外の分野で活躍している幅広い方々との貴重な出会いの機会をいただきましたが、盟友でおられた草地賛一さんと公的支援を考える「オリンピックの会」で先に出会っていました。そんな状況で、村井さんからCODE設立の話を聞き、直ちに参加表明をしました。CODEでは、阪神の復興が続いていることもあり、なかなか充分な貢献が叶いませんでしたが、スリランカやハイチの支援で貴重な経験をさせていただきました。毎月開催された運営委員会では、小さな優しい声でしたが、内容は人間の尊厳や基本的人権についてとても強固で原則的な意見だったのが印象的でした。

野崎隆一（CODE元理事・神戸まちづくり研究所）

芹田先生へのメッセージ

芹田先生に初めてお会いしたのは、阪神・淡路大震災の支援活動の現場でした。法学者として国際法・国際人権法の知識と経験を基に、いつも「自分はあくまで研究者であり実践者ではない」と言いながら、活動に示唆を与え、行政側では有識者として多くの場面で調整役などを務めてくださったと思います。

芹田先生を紹介するとき、私はまず「人間が大好きな方です」と伝えています。研究者として頂点に立ちながら、人間愛に裏付けされた熱い思いで、ご自分の知識を惜しみなく社会に還元するという姿勢は、眞の研究者のるべき姿だと思います。神戸を離れられても、ここで活動をする者たちの道導として、引き続き見守ってくださるようお願いします。

吉富志津代（CODE前副代表理事・多言語センターFACIL理事長・名古屋外国語大学教授）

受援から出た支援の人権感覚

CODEの母体は、いうまでもなく阪神大震災の地元のみなさんであり、内外から支援を受けた受援者です。一方的な支援を受け続けるのは、人としてしんどいことなのですが、「受援力」という言葉を室崎益輝現CODE代表理事が見出して価値を共有できるようになったのは、ずいぶんとのことです。

そんな中で芹田さんが実行委員長を務めた「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」は、災害と無縁では生きられない地球社会に必要な価値創造を目指しました。KOBEの市民が、一方的な受援者でいてはいけないというメッセージとして発信されたのです。その成果の一つが、CODEの誕生であるのは言うまでもありません。やもすると、支援側の感覚だけで行いがちながら国際的な災害救援でしたが、海外であっても直後の緊急時だけではない支援を行いうるという方向性を導いたのは、国際法に確固たる視野を持った芹田さんがいたからでした。たくさんの学びをありがとうございました。

中川和之（CODE監事・時事通信社）

芹田先生へのメッセージ

芹田先生、これまで親しくご指導いただきましたことに深く感謝申し上げます。先生のお言葉はいつも広く深く、議論が進みました。先日の震災26年企画でも、人間の尊厳について言及があり、NGOはその尊い存在の「最後の一人」を真に代表する点において公益を担うというお話が印象に残りました。

CODEの理事を務めたコープこうべの先輩からは、「信念の人でありながら、連携の可能性の芽をつまぬよう寛容に接していただいた」と聞いています。新型コロナ感染症が自国第一主義では終息しないと分かるにつれ、地球温暖化に起因する自然災害が頻発するにつれ、「世界はつながっている」ことを深く実感するようになりました。遠くの人の悲しみ苦しみに寄り添えるボランティアを生協にも増やしていきたいと思います。

中川寿子（CODE前理事・生活協同組合コープこうべ）

2020年度事業報告 & 2021年度事業計画

海外災害地への援助活動事業

アフガニスタン

◇ 2020年度報告

2003年より実施しているぶどう畑再生支援事業は、タリバンによって焼き払われたぶどう畑を再生するために現地に協同組合を設立しました。300万円を原資に288世帯へのマイクロファイナンス（小規模融資）方式で始まりましたが、17年間で550世帯まで増えました。2013年から始まったアフガニスタンの有機レーズンの輸入・販売は、570kgにのぼりました。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で輸入販売は減少し、10kgのみにとどまりました。

◆ 2021年度計画

2021年度は、現地の有機レーズンの輸入販売を例年の60kgに戻すよう努力していきます。また、2001年のニューヨーク同時多発テロから20年という事で、レーズンを通じてアフガニスタンの現状を知っていたらしく機会「農業と国際協力（アフガニスタンからの贈り物）」などを積極的に作っていきます。

※8月15日、アフガニスタンではタリバンが全土を制圧し、現在、非常に厳しい状況に陥っています。今後の情勢を見極めつつ、レーズンの輸入を行っていきます。



再生したぶどう

中国・四川省

◇ 2020年度報告

2008年の大地震後、CODEは、多国籍のボランティアと共にがれきの片づけや祭りの開催、木造耐震住宅のデザイン提供、伝統建築による老年活動センターの再建、日中NGO・ボランティア研修交流事業などを実施してきました。2020年度は、新型コロナウイルス感染症で現地への渡航が困難になり、交流事業などは中止せざるを得なくなりましたが、新型コロナウイルス感染症支援として、カウンターパートの張国遠さん（NGO備災センター／新安世纪教育安全科技研究院）たちと共に湖北省武漢支援を開始しました。また、張さんや大阪大学渥美公秀教授と共に立ち上げた国際アライアンス「IACCR」には14の国と地域が加盟し、16回の国際会議を開催し、コロナ禍の各地の取り組みや経験を共有してきました。

◆ 2021年度計画

コロナの状況を見つつ、四川への渡航を再開し、引き続き光明村の老年活動センターの活用をフォローしていきます。また、現地NGOと共に防災・減災の研修などを実施します。また、高校生・大学生が海外の被災地で学ぶ日中NGO研修も再開します。新型コロナウイルス感染症支援では、IACCRの主催で各国のメンバーを講師に6回の研修を実施し、経験や情報を共有していきます。



中国のボランティアによるマスク配布

インドネシア

(ロンボク島地震、スラウェシ島地震・津波、スンダ海峡火山津波)

2018年は、災害が立て続けにインドネシア各地を襲いました。CODEは、現地カウンターパート、エコ・プラウォトさんのネットワークを通じて、支援に取り組んできました。ロンボクでは、住民のワークショップを通じて木造住宅の意義を考え、スラウェシでは、液状化で故郷を失った子供たちの居場所をつくり、スンダでは現地と日本の専門家の学び合いに向けて動いてきました。しかし、インドネシアは新型コロナウイルス感染症が非常に深刻で、移動制限などもあり、どのプロジェクトも中断せざるを得ない状況に陥りました。2021年度は、現地のコロナの状況を見つつ、プロジェクトを推進していきます。



ロンボク島の伝統的な木造家屋と仮設住宅
(2018年当時)

東日本大震災

CODEは、姉妹団体である被災地NGO協働センターを通じて東日本大震災における活動を共有してきました。また、これまで中国、ハイチ、アフガニスタンなどの海外の被災地をつなぐ役割を担ってきました。2021年度は、室崎代表理事に東日本大震災の現状や課題を語っていただく場を持ちます。東北では、復興の在り方など課題は少なくありませんが、震災から10年を機にCODEとしては今年度で一応の区切りをつけますが、必要に応じて被災NGO協働センターと連携していきます。

新型コロナウイルス感染症

2020年2月から開始した本事業では、最初に爆発的な感染拡大の起きた中国・武漢の支援から始まり、四川のNGOの構築したオンラインボランティアの仕組みを活用し、数万人の武漢市民の主体的な動きをサポートしました。また、14の国と地域のメンバーが参加する国際アライアンス「IACCR」を立ち上げ、世界各地の取り組みや経験を共有してきました。その他、福井の医療機関へのアルコール消毒液の提供、神奈川の方を通じてネパールに手作りマスクの提供も行いました。

また、2020年度後半は、フィリピンの台風(2013年)の被災地の住民がコロナで生活困窮に陥っていることから、セブ・バンタヤン島の女性の行うコミュニティ・キッチン&ガーデニング(困窮家庭への食事の提供や野菜栽培など)の活動をサポートしました。

2021年度は、国際アライアンスの研修(2021年3月~7月 全6回)で、CODEやCODEのカウンターパートが講師を務めます。フィリピンの生活困窮者支援も引き続き行なっていきます。



フィリピンでの食支援「コミュニティ・キッチン」

2021年度総会を開催しました

6月19日(土)に、2021年度総会を開催しました。今年度は、新型コロナウイルスの影響により、会場とオンライン併用での開催となりました。正会員21名(うち委任状3名)、オブザーバー4名にご参加いただき、議案である2020年度事業報告・決算、2021年度事業計画・予算・基本方針について審議され、承認されました。事業報告と計画の概要、基本方針については、本誌に掲載のとおりです。今後ともみなさまのご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

国内外のネットワーク構築事業

2020年度は、これまでの神戸学院大学（社会防災特別講義II）の講義に加え、同大学ボランティア論IIの講義、親和女子大学（国際ボランティア論）なども受託しました。また、関西NGO協議会とは、ワンフェス for Youth や新型コロナ関連の共同ファンドの立ち上げなどで協働してきました。コープこうべとは、平和の集いでレーズン販売や講演、近畿ろうきんとは、社会貢献預金「笑顔プラス」を通じた寄付や「コロナとこれから市民社会に向けて」のコラボ企画でも協働しました。その他、神港橋高校の通年インターン生の受け入れや、舞子高校、葺合高校、龍谷高校、神戸工科高校などの講義、全国中高生防災会議、ワンフェス for Youth などで高校生ともコラボしました。

2021年度も引き続き大学での講義や、未来基金、ワンフェス、近畿ろうきんなどで高校生、大学生とのコラボ企画を実施していきます。海外とのネットワークは、引き続き、中国、フィリピン、ネパール、インドネシア、バングラデシュのNGOなどのカウンターパートとの関係をそれぞれの事業を通じて深めていきます。

寄稿

コロナ禍と災害

鵜飼 卓

NPO 災害人道医療支援会 (HuMA) 顧問・
兵庫県災害医療センター顧問・CODE 正会員

私の敬愛する災害医学の先達である S.W.A.Gunn 博士によると、「災害は人と環境との生態学的な関係の広範な破綻=被災地以外からの援助を必要とする規模で生じた深刻かつ急激な出来事である」と定義される。そして災害は、自然災害、人為災害とテロなどの特殊災害である CBRNE (化学・生物・放射性物質・核・爆発物) に分けて語られる。本来、新型コロナ肺炎のような感染症は正しく対応すれば抑え込んで大流行を予防することができる筈で、コロナ禍はいわば「人為災害」ともいえるだろう。しかも、新型コロナ肺炎 (COVID-19) は今やまさに人と生活環境との通常の関係を大きく破綻させており、「災害」そのものの様相を示している。

2020年2月3日、豪華クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号 (DP号) が新型コロナ肺炎ウイルス (SARS-CoV-2) に感染した人を含む乗客乗員3,713人を乗せて横浜港に入港した。その日のうちに検疫官が乗り込み、発熱などの症状を呈していた人々の咽頭拭い液の検査をした結果、約1/3の人にSARS-CoV-2感染が確認され、水際作戦が始まった。感染者が次々と新たに発見されて、対応できる医療スタッフも不足したため、関東近辺のDMAT (災害医療支援チーム) も横浜港に招集されて感染者のトリアージと病院への搬送業務を行い始めた。しかし、また航空機で入国した人々からも感染が広がって水際作戦は失敗に終わった。岩田健太郎先生がDP号での防疫活動に関してショッキングな発言をSNSで流されたことを覚えておられる方も少なくないだろう。DP号の現場はまさにパニック状態であったに違いない。しかし、当時、これが「災害」であるとは、政府関係者はむろんのこと、多くの医療関係者も認識してはいなかった。

その頃、兵庫県災害医療センターでは第25回日本災害医学会（会長：中山伸一兵庫県災害医療センター長）を神戸国際会議場などで開催すべく準備の最終段階を迎えていた。ところが降って沸いたコロナ騒ぎで、学会の開催そのものさえも危ぶまれる事態となってしまった。DP号で防疫や診療、

搬送に携わっていた医師たちの参加も予定されており、絶対に学会参加者から感染拡大を起こさせてはならなかったからである。結局、参加者には手指消毒とマスクの着用をお願いし、学会参加の愉しみの一つである会員懇親パーティを取りやめ、DP号で活動した方々には参加をご遠慮願うなどの対策を取りながら、阪神淡路大震災から四半世紀の記念すべき学会を神戸の地で無事に開催（2月20～22日）することができた。最終日には村井雅清さんにもご登壇いただいた。しかし、この災害医学会においてさえ、まだ殆どの参加者がCOVID-19の感染拡大を「災害」とまでは捉えていなかった。

地震や風水害などは誰の目から見ても「災害」と映りやすいが、感染症の流行はなかなか「災害」とは捉えにくい。コロナ禍も中国の武漢で不審な肺炎の死者が出始めた頃はパンデミック（世界的大流行）の初期兆候や「災害」であると考えた人は殆どいなかった。WHOのテドロス事務局長ですらなかなかこれをパンデミックであると認めなかった。

2020年の春には、医療用のマスクやゴム手袋、防護服が足りなくなり、病院ではプラスティックのゴミ袋を裁断したり、レインコートを防護服の代用にした。テレビで青いラインの入った白い防護服に身を固めた医師や看護師の姿をよく見かけるが、あのPPE (Personal Protective Equipment、個人防護具) をつけて治療やケアを行うにはとてもエネルギーを要する。頭をすっぽり覆い隠すキャップ、声も籠りがちで、長時間つけていると息苦しくなるN95マスク、視野が狭くなるゴーグル、指の感覚が伝わりにくい二重のゴム手袋、そして暑いし動きも楽ではない感染防護服。それらの着脱の手順を決して間違ってはならない。コロナ患者の処置をした後に他の患者にそのままで接してはならない。また、コロナウイルスに汚染されたかもしれない物品を不用意に持ち出して感染を広げてはならないので、汚染エリアと非汚染エリアを厳重に分けて（ゾーニング）、それぞれのエリアで働く人たちで仕事を分担す

NGO ことはじめ

例年通り樋木、村井 CODE 理事を講師に「コロナ禍・ポストコロナの NGO とは」のテーマでオンラインで開催しました。2021 年度は、CODE 未来基金にかかわった若者を講師に「もうひとつの生き方、働き方」を語っていただく機会をつくります。



CODE 未来基金 六甲山デイキャンプ

CODE 未来基金

2020 年度は、CODE 未来基金のすそ野を広げること、若者の主体的な活動を目的として 11 月に「六甲山デイキャンプ」を実施しました。その中で農業を学びたいという声から、丹波農業フィールドワークが始まりました。3 月に第 1 回目を実施し、有機農業のグループ「ムラとマチの奥丹波」を通じて学生たちが農業を学ぶ中で食の安全などの課題を共に考えることができました。

また、「世界のステイホームから」と題して海外の学生と日本の学生がオンラインで交流する機会も 6 回開催し、若者同士が学び合いました。

2021 年度も引き続き丹波農業フィールドワークを実施し、農業だけでなく、災害や海外とのつながりも学べるような勉強会（アフガニスタン、ハイチなど）を実施していきます。また、足元の在日外国人や困窮している子どもたちへ丹波の野菜を提供する活動も未来基金の学生たちと実施していきます。

る。彼らが一緒に休憩をとることもできない。このようにしてコロナ患者の対応に要するエネルギーは普通の患者の数倍程度に感じられ、一人のスタッフを長時間フル PPE でコロナ患者に対応させることはできない。したがって、病院も訓練を積んだスタッフが沢山いなければコロナ患者をおいそれと受け入れるわけにはいかないのである。兵庫県災害医療センターからはコロナ患者受け入れに重要な役割を担っている県加古川医療センターへの人的支援を続けている。

大阪の医療が逼迫した第四波の時には、大阪府がプレハブ病舎を設営して自衛隊員や他府県の看護協会からの応援、ボランティアの協力などでかろうじて乗り切った。NPO 災害人道医療支援会 (HuMA) も会員のボランティアナースを大阪の臨時コロナ病舎に派遣した。しかし、今日ではこのようにピンチの地域を応援したくても、全国的に自分たちの足元での対応に精一杯で、応援に行くことができない。

病床が不足して、ホテルを借り上げての宿泊療養施設がつくれられた。それも足りないので自宅療養を余儀なくされる人が多く、まともな医療を受けられないままに自宅で亡くなる人がいる。この報道を聞くたびに本当に胸が痛む。また、コロナ以外の病気やケガで入院したり、施設に入所している方々にお見舞いや面会ができるのも、その本人はもとより家族にもつらい話だ。最後のお別れすら許可されないことが多い。このコロナ禍の中で、大地震や大きな風水害などが起これば、過密になりがちな避難所は一体どうなるのだろうと案じてきた。そこでの爆発的なコロナの感染が起りうるからである。これまでのところ、昨年からの大きな自然災害は熊本の球磨川の氾濫と熱海の土石流災害、佐賀県武雄市を襲った豪雨災害であった。私も HuMA の一員として熊本県芦北町の被災診療所のお手伝い

を短期間させていただいたが、泥の掻き出しや清掃の手伝いをするボランティアも県内から限られ、復旧はなかなかかはかどらなかった。

政治家は、「1,000 床規模のコロナ専用野戦病院を作ります」などと安易に語るが、どこから医療スタッフを集めてくるつもりなのだろうか。医師にしても、ナースにしても、その他の医療職にしても、日本の医療現場は日頃からそんなに人的な余裕をもって仕事をしているわけではないのである。

世界に誇る国民皆保険制度があり、誰でもがハイレベルの医療を受けられる極めて恵まれた国だと思っていたこの日本で、一体全体どうしてこんなことになってしまったのだろう。その根本にはここ十数年来の医療政策に問題があったように思える。高齢化社会で高騰する医療・介護費を抑制すべく、人員削減、病床の制限、保健所の統廃合、研究費削減、などが行われてきたことが響いているのではないだろうか。国立感染症研究センターの予算さえも大きく削減されてきたと聞く。そして、コロナウイルスは季節性のカゼ症候群の原因の一つとされていたので、COVID-19 も近いうちにインフルエンザのようになるだろうという油断が為政者にも医療従事者にも、一般市民にもあったかもしれない。

この原稿のキーを叩いている 9 月中旬、ようやく第五波のピークは過ぎてきたようだ。このまま終息してくれることを心から願うが、冬にかけてまた新しい変異ウイルスによる六波、七波が襲ってくるかもしれない。ワクチンを 2 回打ったからもう安心だとは思わず、阪神大震災などの災害を耐え忍んだ日々を思い起こして、今一度心を引き締め、「手洗い、マスクの着用、三密回避」を心がけ、みんなでコロナ禍を抑え込んでいきたいものである。

CODE 未来基金 NEWS

丹波農業プロジェクト

CODE 未来基金のプロジェクトとして、兵庫県丹波市市島地区の農業グループ「ムラとマチの奥丹波」(ムラマチ)のみなさんにご協力いただき、農業プロジェクトを行っています。フィールドワークで農業体験やムラマチの方々との意見交換を行ったり、オンラインで勉強会を行っています。

農や食は、国を問わず、生きていくうえで欠かすことのできないものであり、被災地の生活再建においても重要なテーマです。このプロジェクトを通じて農業そのものを学ぶだけでなく、ひとつの地域にかかわりながら、農村のくらしと課題、食の安全、自然とのつながり、そして生き方などについて学生たちと共に考える機会にしていければと考えています。(立部)
※参加者の学年は当時



第1回フィールドワーク

日 程：2021年3月13～14日

参加者：原田梨央さん（武庫川女子大学4回生）
柳瀬彩花さん（追手門学院大学2回生）
山村太一さん（神戸学院大学2回生）
同行者：吉椿、立部



加工品（黒大豆味噌）作り



ジャガイモ植え付け



2014年丹波豪雨災害の被災地視察



意見交換会

参加者の感想（抜粋）

- ・ ジャガイモの栽培は昔から行われているはずなのに、未だに方法は各農家バラバラであり、農業に正解はないのだと学んだ。同時に農業の奥深さを感じた。
- ・ 「どんな人がどんな想いで作っているのか」「どれだけ身体にいいか」「有機野菜がとても美味しいこと」などを知ることができた。
- ・ 日々の生活の中で調整された味が自然と本当の味だと思いこんでいて、普段食べている物に対してあまりにも意識を向けていなかったことに気づいた。
- ・ 農家さんは「循環していく生活」や「現金収入がなくても食べていける力」の重要性を強調していた。そういった、生きる上で最も基本的なことはこれから災害時やコロナ禍などにも試される力であると感じる。

第2回フィールドワーク

日 程：2021年5月29～30日

参加者：黒瀬孝天さん（大阪大学1回生）

塩井杏奈さん（大阪大学大学院博士前期課程2年生）

陶冶さん（兵庫県立大学大学院博士課程5年生）

森本莉永さん（豊岡市地域おこし協力隊）

柳瀬彩花さん（追手門学院大学3回生）

山内優さん（関西大学3回生）

山村太一さん（神戸学院大学3回生）

同行者：立部



田植え



ジャガイモ土寄せ



サツマイモ植え付け

参加者の感想（抜粋）

- 一緒に農作業をすることで、土地や地域の人々とのつながりを感じた。
- 日本の農薬規制が他国に比べてかなり緩いと知って驚いた。教科書では、日本の農産物は他国と比べて安全で、国産を買うことが日本の農業振興になると習ってきたので。
- これからの農業の在り方について質問したところ「あなたはどう思う？」と問い合わせられた。自分事として考えられていなかつたこと、自分も当事者であることに気づかされた。
- 「自然界に学べ」という言葉が印象深い。自然界の協力関係や、農業だけでなく人間としてどうあるべきかという問い合わせられた。人の心が大事であり、それぞれが「感性」を磨くことが、結局は農業を立ち直すことにつながるということに気付いた。
- 大学生活も残り少なくなり将来について考えることが増えた現在、農業だけでなく生き方についても深く考えさせられた。

新型コロナ支援プロジェクト

CODE 未来基金ではコロナ禍での「足元の支援」として、在留外国人やひとり親世帯など身近なところで特にコロナ禍で困窮している方々を支える活動を開始しました。

神戸市長田区のベトナム寺院や、兵庫区で子ども食堂や地域交流活動を行っている「レンタルスペース &A」、国際交流シェアハウス「やどかり」を訪問し、有機野菜やお米をお届けしつつ、お話を伺うなど交流しています。野菜は、CODE 賛助会員の山本健一さんのご協力で兵庫県丹波市やたつの市の農家さんから、お米は、コープこうべさんからご支援いただいています。規格外の野菜を買い取らせていただくことでフードロスの削減にも貢献しています。

ベトナム寺院では、コロナの影響で学校に通えなくなり、さらに在留期限が切れて不法残留になってしまっている留学生のお話など、外国人の厳しい状況を伺いました。また、「&A」では子ども向けの放課後学習や夏休み体験プログラムに学生が参加し、子どもの学ぶ姿に向き合いました。

野菜の提供や学生の学びの場を継続していくために、野菜の購入や運搬の費用が必要です。ぜひご寄付で活動を支えてください！

※ご寄付の方法は P.16（裏表紙）をご覧ください。



有機野菜をお届けしながら交流しています

新型コロナ支援プロジェクト

フィリピン

～コミュニティ・キッチン&ガーデニング～

フィリピン・バンタヤン島のサンタフェ町の漁村で新型コロナウイルス感染症支援プロジェクト「コミュニティ・キッチン&ガーデニング」を実施しています。2013年台風ヨランダ以来、CODEはボオックとオコイ2地区の住民アソシエーションおよび現地NGOと復興支援で連携してきました。本プロジェクトを通じて、アソシエーションのメンバーたちの食を通じた支え合いをサポートしています。(立部)

女性たちの主体性を引き出す

コミュニティ・キッチンでは、女性たちが中心となってメニューを決め、食材を調達し、共同で調理をして、子どもたちを中心としたメンバーの家族に食事を提供してきました。

現地NGOのジョジョさんは、メンバー同士協力してこの活動を進めた経験により、女性たちの主体性やリーダーシップが促進されたと評価しています。また、アソシエーションの漁師たちは、平時から不安定な漁業で生計を立てています。ジョジョさんはまた、「今回の取り組みは感染症下や災害時だけでなく、平時の漁業の収入が減って困窮した時などにグループで助け合うためにも重要だ」としています。

本プロジェクトのような経験の積み重ねが、一時的な経済支援だけでなく、今後のメンバーたちの支え合いにもつながっていくことを期待しています。

自分たちで食を生み出す

コミュニティ・ガーデニングでは、メンバーたちが種や有機肥料を購入し、それぞれの家庭で野菜を育てています。育てた野菜は、空心菜、オクラ、さやいんげん、ナス、ゴーヤ、チリなどです。どの家庭も広い畠があるわけではないので、家の敷地の限られたスペースに植えたり、バケツや土嚢袋をプランター代わりに活用するなど、工夫しながら育てています。

もともと経済的に厳しい漁村の家庭では、さまざまな食材を調達するのが難しく、日によっては例えばご飯と干魚だけの食事ということもあります。野菜を自分たちで栽培し、それを少しでも普段の食事に取り入れることは、子どもたちを含めたメンバーの健康維持や免疫力向上のためにも重要です。

また、この経験は、危機にあって食べ物をよそから買ったり与えてもらいうばかりではなく、自分たちで生み出す・支え合うという意識の醸成にもつながったのではないかと思います。



新型コロナ支援プロジェクト 国際アライアンス IACCR

2020年2月4日、CODEはいち早く新型コロナウイルス感染症支援を四川のNGOと連携して開始しました。武漢市民の主体的なボランティア活動を支えるために、四川のNGOたちがオンラインボランティアの仕組みを構築しました。CODEもそのメンバーとして武漢のボランティアの動きやこれまでの災害支援でつながってきた海外のカウンターパートから世界各地のコロナ禍の情報を共有、発信してきました。その後、大阪大学渥美公秀教授と四川のNGOたちで国際アライアンス「IACCR」を立ち上げ、オンラインで国際会議を開催し、各地の取り組みや経験を共に学び合ってきました。

2021年度、IACCRは各国のメンバーと連携して、パンデミックに関する研修を6回実施しました。講師は、CODEや渥美教授だけでなく、CODEのカウンターパートでもあるエコ・プラウォトさん（インドネシア/建築家・アーティスト）も担っています。

第4回の研修の講師をCODE（吉椿）が担当し、パンデミックにおける自然災害とその支援の在り方、コロナによって顕著になった「取り残されている人たち」などをSDGs（持続可能な開発目標）の視点と共に講義しました。受講者の中からは「防災先進国の中でもなぜコロナでこんな状況になっているんだ」「オリンピックは大丈夫なのか」などの質問を受け、「政府の失策、そして国民の政府への不信感」としか答えることができませんでした。海外でも、日本のコロナ対策や市民社会に関心を持っている人が多くいることを感じました。（吉椿）

Covid19に立ち向かうコミュニティと社会的組織の国際交流と国際協力プロジェクト

【内容・日程・講師】

第1回 3/27 コミュニティは、リスクの調査と感染症の予防と管理をどのように行うか（中国）

第2回 4/17 社会的な組織は、不利を被っている人たちに対してどのように効果的にサービスを提供するか（中国）

第3回 5/15 パンデミックにおける公衆衛生と心理的サービス（中国）

第4回 5/29 世界的パンデミックにおけるSDGsの課題と実践（CODE、中国）

第5回 6/26 パンデミック対応の国内外の事例：コミュニケーション①（インド、インドネシア）

第6回 9/24 パンデミック対応の国内外の事例：コミュニケーション②（メキシコ、大阪大学、中国）

受講者：中国のNGO、研究者など市民社会の関係者約200名

主催：新安世紀教育安全科技研究院（IACCR事務局）

共催：大阪大学大学院渥美研究室（日本）、CODE（日本）、

CEER（中国成都）、愛有戲社區發展センター（中国成都）、
四川尚明公益研究センター（中国成都）、

RCE Srinagar（インド）、Future Team Mexico（メキシコ）、
デュタ・ワチャナキリスト教大学（インドネシア）

後援：成都市民政局、成都市チャリティー協会

アフガニスタン救援プロジェクト

アフガンの家族を支えてください！！

CODEは2003年からアフガニスタンのぶどうを再生する支援を行ってきました。2013年からは有機レーズンを日本に輸入販売（現時点で570kg）することでアフガニスタンの暮らしや文化を日本に伝え、考えてきました。

2021年8月15日、米国同時多発テロから20年、アメリカ軍の撤退のタイミングでタリバンが全土を制圧しました。再びタリバンによる統治に不安を抱える人々は国外退避をしました。その数12万人以上と言われています。

CODEのぶどう再生支援で共に協働してきたR・Lさん（2017年逝去）のご家族も今後に不安を抱え国外退避を希望していることから、CODEはそのご家族の国外退避をサポートしています。無事に国外に退避できても厳しく困難な生活が予想されます。どうぞご協力よろしくお願ひいたします。（吉椿）

※詳しくはアフガニスタン救援ニュース（ブログ）をご覧ください。

<https://code-jp.org/blog/afghanistan/>

厳しい冬に雪を冠したヒンズークシュの山々、モスクの前で逞しく生きる小さな商人、瞳を輝かせて学ぶ少女たち、そして太古の昔からいのちの水を流し続けるカレーズ…

あの優しいアフガニスタンがよみがえることを願ってやまない。

（CODE理事 村井雅清）

ご寄付の方法はP.16(裏表紙)
をご覧ください。➡



村井理事 女子学校での植樹

スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

4/16	CODE 理事会
4/24	未来基金ミーティング（柳瀬さん、山内さん、黒瀬さん、陶さん、吉椿、立部）
5/12	NGO-JICA 協議会コーディネーター会議に出席（吉椿）
5/15	神戸学院大学社会貢献学入門で講義（吉椿）
5/15	関西 NGO 協議会総会に出席（吉椿）
5/17	NGO-JICA 協議会 NGO のつどいに出席（吉椿）
5/24	未来基金勉強会「アフガニスタンの農業支援から学ぶ」（村井理事、吉椿、立部）
5/28	追手門学院大学非営利組織論で講義（柳瀬さん、吉椿）
5/29-30	第2回丹波農業フィールドワーク（柳瀬さん、山村さん、黒瀬さん、陶さん、山内さん、森本さん、塩井さん、立部）
5/30	国際アライアンス「IACCR」研修で講演（吉椿）
5/31	国際アライアンス「IACCR」KOBE ブランチミーティング（渥美教授、寺本さん、吉椿、立部）
6/3	NGO-JICA 協議会第1回全体会議に出席（吉椿）
6/7	丹波 FW 振り返りの会（柳瀬さん、山村さん、黒瀬さん、陶さん、山内さん、塩井さん、森本さん、立部）
6/15	近畿ろうきん笑顔プラス寄付金贈呈式・寄付先団体会議に出席（吉椿）
6/19	CODE 理事会・総会
6/24	近畿ろうきんラジオ出演（吉椿）
7/4	全国ボランタリズム推進団体会議（民ボラ）のセッションで登壇（吉椿）
7/16	NGO-JICA 協議会コーディネーター会議に出席（吉椿）
7/17	兵庫県立大学「防災の国際協力」で講義（吉椿）
	神戸学院大学社会貢献学入門で講義（吉椿）
7/24	震災26年企画「すべての人に宿るボランティアの心根」（芹田前代表理事）を開催（室崎代表、宮本副代表、村井理事、山口理事、岸本理事、吉椿、立部、原田）
8/6	未来基金丹波農業プロジェクトミーティング（立部）
8/20	未来基金勉強会「フィールドワークとは？」（吉椿、立部）
8/21	「災間を生きる術」で講演（吉椿、宮本副代表）
8/22	室崎代表喜寿記念講演を開催（宮本副代表、村井理事、松田理事、山口理事、中川監事、飛田監事、細川、吉椿、立部）
9/2	未来基金勉強会「西半球最貧国ハイチが問いかけるもの」（ムラとマチの奥丹波のみなさん、吉椿、立部）
9/7	近畿ろうきん職員研修で講演（吉椿）
9/9	○○×国際協力「農業と国際協力 アフガニスタンからの贈り物」で講演（村井理事）（徳山理事、山口理事、吉椿、立部）
9/18	NGO-JICA 協議会 NGO コーディネーター会議に出席（吉椿）
9/19	関西 NGO 協議会常任理事会に出席（吉椿）
9/21	NGO-JICA 協議会コーディネーター会議に出席（吉椿）
9/24	CODE 9月度理事会
10/2-3	第3回丹波農業フィールドワーク（氏家さん、勝川さん、黒瀬さん、駒田さん、陶さん、森本さん、山村さん、吉椿）
10/5	サステナブルアクションセミナーに参加（吉椿）
10/10	日本災害救援ボランティアネットワーク「コロナ座談会」で講演（吉椿）

今後の予定

11/1	舞子高校で講演（吉椿）
11/5	茨木高校で講演（吉椿）
11/13	足湯講演（吉椿）
11/16-18	神戸工科高校で講義（立部）
11/17	たつの中央公民館で講演（吉椿）
12/11	SVA セミナーに参加（吉椿）
12/19	ワンフェス for Youth に参加（吉椿）
12/20	関西国際大学「国際防災協力」で講義（吉椿）

通期の大学講義

- 神戸学院大学「ボランティア論II」
- 親和女子大学「国際ボランティア論」
- 神戸学院大学「社会防災特別講義II」

会員・寄付者 ご芳名 (50 音順、敬称略) 2021/2/22~2021/9/21

いつも応援してくださり
ありがとうございます！



【会員】

相川康子、安藤尚一、石田和子、稻見充典、井上由紀子、
岩尾興一、岩崎信彦、上田耕蔵、上野智彦、鶴飼愛子、
宇都幸子、NGO 自敬寺服部隆志、及川和子、大津暢人、
岡田雅幸、小田尚子、風間養子、片岡幸志、鎌倉千俊、
河崎紀子、河知秀晃、岸本くるみ、北浦和志、北茂紀、
公益財団法人神戸 YMCA、越山健治、小林アイ子、
駒田大地、近藤悦生、斎藤茂樹、阪本美津江、澤登早苗、
塩田明子、島本久嗣、清水有基栄、菅磨志保、杉田文夫、
鈴木有、砂川（山田）光、芹田健太郎、高橋智子、

【ご寄付】

相川康子、青田良介、新井場公徳、飯干大嵩、石田和子、
石原明子、石原凌河、伊勢正、伊藤雅春、稻場圭信、
乾悦子、井上力、井上由紀子、今中由美子、上田豊子、
上野智彦、鶴飼愛子、宇田川規夫、宇都幸子、LNET、
及川和子、大迫雅俊、大牟田聰、大牟田智佐子、岡田雅幸、
岡部徹、岡本禮子、尾崎禮子、小田尚子、鬼本英太郎、
我謝賢、河崎紀子、菊池貞介、岸下正純、岸本くるみ、
北浦和志、北茂紀、木村佐枝子、清原桂子、桐島道衛、
楠井和子、工藤美佐、小泉桂子、
公益財団法人神戸 YMCA、小林アイ子、小牧正子、
近藤悦生、斎藤茂樹、酒巻佐代子、佐藤敬生、佐藤英代、
澤登早苗、塩田明子、師玉健男、島田誠、邵珮君、城下英行、
スエヒロクミ、菅磨志保、菅義正、杉浦健、住友直幹、
スリーA増田未知子、芹田希和子、高橋夏美、竹内由美、
武田かおり、多田邦晃、多田茉莉絵、立部貴文、田中一正、

高橋夏美、竹内由美、武田節子、
武田かおり、竹代一洋、立部貴文、
田中一正、玉岡昇治、田村快光、土居峻、中尾正嗣、
中川和之、中川寿子、永松伸吾、中村大蔵、西保昇、
林ひさ子、飛田雄一、兵頭晴喜、船橋裕晶、古川敏美、
不破雅実、北後明彦、満田里美、宮崎洋介、宮本匠、
村田昌彦、村山日南子、茂幾保代、安富信、山崎水紀夫、
山崎清、山崎達枝、山添令子、山本良治・山本佳子、
吉富志津代、亘佐和子

田中幸子、田中純一、田辺エツ、玉岡昇治、田村快光、
旦保立子、津久井進、土本基子、椿佳代、鄭恵姫、内藤悠、
中川和之、中川寿子、永松伸吾、中水かおる、西海恵都子、
西谷真弓、日本基督教団名古屋中央教会、野崎隆一、
野村昌弘、橋本京子、長谷川庄司、はっとりいくよ、
林里美、林ひさ子、半田裕子、飛田雄一、兵頭晴喜、
藤岡勇貴、藤室玲治、藤本延啓、紅谷昇平、北後明彦、堀芳美、
松江直子、松岡千景、馬渕俊之、三浦真里子、三上喜美男、
宮崎洋介、宮本匠、三好ひろ子、武藏野美和、村尾佳美、
村上隆行、村田昌彦、村山日南子、室崎益輝、茂幾保代、
本岡秀子、森伸一郎、安富信、山口由美子、山崎清、
山下武彦、山添令子、山本健一、山本彰子、山本弘、
山本良治・山本佳子、柚原里香、吉川忠寛、吉積洋子、
米田玲子、林怡資、亘佐和子

— CODE Supporter's Voice —

阪井健二さんより

阪神淡路大震災被災地支援で神戸に入ったご縁から
CODE の設立時から参加させていただきました。

私の人生の師詩人の坂村真民さんは、『国境のない鳥
になる』と晩年よく言わっていましたが、地球上の大自然
の中を往来する鳥達には人間が線引きした国境など関
係ありません。人間も本来大自然の中で暮らしながらそ
の土地の気候風土に即した生活から民族や国を形成して

きただけで国境も対立を生むためのものではなかったは
ずです。

災害の起きた国や民族の伝統や文化を尊重し、そこから
学びながら復興の支援をする CODE の活動に敬意を
表し、これからも微力ながら応援させていただきながら
学ばせていただきたいと思います。よろしくお願ひいた
します。

阪井さん、いつもありがとうございます！

Special thanks: 岸本くるみ (イラスト)

ご協力のお願い

みなさまからの応援があって、CODEは活動を継続できます。
お家から世界へ。CODEが支援のお気持ちを届けて、世界とあなたをつなぎます。



寄付して応援

活動を継続するためのご寄付です。

全体運営、特定の救援プロジェクトへのご寄付の指定も可能です。
25%を上限に管理運営費とさせていただきます。

ボランティアとして応援

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などの
ボランティアを募集しています。
詳しくはCODE事務局までお問合せください！

知って・学んで応援

あなたの住んでいる地域で開催される講演会に
CODEスタッフを講師として派遣します。
テーマ・内容等、お気軽に事務局までご相談ください！

サポート会員になって応援

【正会員（総会での議決権あり）】

個人・学生	: 年会費 5,000円 × 1口以上
NPO/NGO	: 年会費 5,000円 × 1口以上
企業・団体	: 年会費 30,000円 × 1口以上

【賛助会員】

個人・学生	: 年会費 2,000円 × 1口以上
NPO/NGO	: 年会費 2,000円 × 1口以上
企業・団体	: 年会費 10,000円 × 1口以上

ともにCODEを創ってくださる方を
いつも募集しています

お振込み方法

■ ゆうちょ銀行

支店名: ○九九 (ゼロキュウキュウ)
支店番号: 099
口座番号: 0330579 (当座)
口座名義: CODE

■ 近畿労働金庫

支店名: 神戸支店
支店番号: 642
口座番号: 8881040 (普通)
口座名義: CODE 海外災害援助市民センター

【郵便振替】

加入者名: CODE
口座記号番号: 00930-0-330579

【クレジットカード】

CODEのホームページより ⇒
<https://code-jp.org/donation/>



※通信欄に用途をご明記ください。

(例「アフガニスタン」「未来基金」「賛助会員」)

発行元 (特活) CODE 海外災害援助市民センター

〒 652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

TEL : 078-578-7744 FAX : 078-574-0702

E-mail : info@code-jp.org

HP : <http://www.code-jp.org/>



Facebook



Twitter



Instagram